

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第六十八弾

神社本庁再生への道―その三十一

外苑再開発問題は、田中体制と絡んでいるのか―  
稲、瀬尾両氏は田中派神社本庁長を名誉毀損で提訴

外苑再開発と田中体制

藤原登 (フリーライター)

神宮外苑の再開発と神社本庁の田中 打田体制との関係については、以前から種々噂されてきた。真相は今も不明であるものの、ここに来て、より真実性を帯びてきたと感じている。その理由を以下に述べる。

神宮外苑の再開発と神社本庁の田中 打田体制との関係については、以前から種々噂されてきた。真相は今も不明であるものの、ここに来て、より真実性を帯びてきたと感じている。その理由を以下に述べる。

神宮外苑の再開発と神社本庁の田中 打田体制との関係については、以前から種々噂されてきた。真相は今も不明であるものの、ここに来て、より真実性を帯びてきたと感じている。その理由を以下に述べる。

神宮外苑の再開発と神社本庁の田中 打田体制との関係については、以前から種々噂されてきた。真相は今も不明であるものの、ここに来て、より真実性を帯びてきたと感じている。その理由を以下に述べる。

神宮外苑の再開発と神社本庁の田中 打田体制との関係については、以前から種々噂されてきた。真相は今も不明であるものの、ここに来て、より真実性を帯びてきたと感じている。その理由を以下に述べる。

神宮外苑の再開発と神社本庁の田中 打田体制との関係については、以前から種々噂されてきた。真相は今も不明であるものの、ここに来て、より真実性を帯びてきたと感じている。その理由を以下に述べる。

建設する大阪護国神社の事案も、かつての神社本庁であれば、簡単には承認し難い内容であったという。ここで取り上げたのは東京と大阪の事例であるが、両都府の神社本庁長は、田中「なほ在任」総長の覚えめでたい小野貴嗣、藤江正護の両氏であり、ともに神社本庁の常務理事として田中氏に仕える立場にある。もう、これ以上の詮索は不要であらう。

これらの事案と、外苑再開発の問題は、規模も内容も大きく異なるが、周辺から反対の声があるだけでなく、神社本庁憲章に照らしても重大な問題があるという点において、共通している。

神社本庁憲章を最も遵守すべき神社本庁自身が、憲章の精神に平気で反する姿勢を明確にしたのは、田中体制の確立期とほぼ同時期である。本連載の嚆矢となった平成二十九年十一月号で、早乙女好雄氏が取り上げた通り、山口県・上関原発の建設を巡り、神社の尊厳を守るために社有地の売却に反対していた四代正八幡宮の林春彦宮司は、平成十五年に神社本庁から解任された。神道政治連盟の幹事長であった田中氏が、神社本庁の副総長に就任したのは、その翌年の平成十六年六月であるが、神社本庁が八幡宮所有地の中国電力への財産処分を承認したのは、その直後の平成十六年八月二十日であった。

稲、瀬尾両氏が  
神社本庁長を提訴

稲貴夫、瀬尾芳世の両氏が、地位の保全を求めて神社本庁を提訴した裁判は、昨年四月に最高裁で神社本庁の全面敗訴が確定し、両氏は部長待遇で復職しているが、去る六月二十八日には、両氏による新たな裁判の第一回口頭弁論が東京地裁で行われた。この裁判の被告は、東京都神社本庁長の小野貴嗣氏と、宮崎県神社本庁長の本部雅裕氏であり、訴えの内容は、名誉棄損による損害賠償の請求等である。この事件の発端は、最高裁判所で判決が確定した直後の昨年四月二十六日、都内で開催された一都七県神社本庁評議員の会に出席していた小野氏が、稲瀬尾の両氏は裁判の中で、「自らを労働者である」「神社本庁憲章は関係ない」などと主張しているとし、「全国の神職を指導すべき立場にある神社本庁職員として、あるべき姿に悖るものであり、到底容認できるものではありません。」などと記載した文書を出席者に配布し、賛同を求めたこと。そして本部氏については、これも判決確定後の昨年五月二十七日、神社本庁で開催された評議員会において、百数十名に及ぶ参集者の面前で、稲瀬尾両氏は裁判の中で、「原告らは労働者であり、本庁憲章に定める神職ではない」とはっきり発言している。そこで本庁は、本庁と全国神社を守るために、最高裁まで争う決定をしたんだ、という趣旨の発言をしたことにある。

神社本庁の常務理事でもある小野氏は、最近発覚した神社本庁元主事による数千円横領事件をめぐる、その責任逃れに必死のようだが、是非とも神社本庁憲章が神職に求める「社会の師表」として、行動して戴きたいものである。

宮司解任手続きに違法行為があったとして、山口県神社本庁を提訴していた林氏は、裁判中の平成十九年に急逝された。さぞかし無念であったことと拝察する。そして今、林宮司の問題提起を切り捨てた神社本庁は、その後も田中体制のもとで強権密室政治を二十年間続けた結果、組織そのものがボロボロと自壊を始めている。一日も早い正常化が俟たれる所以である。

藤原 登 (ふじわらのぼる)

昭和二八年、東京に生まれる。昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。